

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006 年度～2009 年度

課題番号：18530549

研究課題名 (和文) 母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人行動の改善に及ぼす効果

研究課題名 (英文) Women's optimistic attributional style improve the interpersonal behavior of their children

研究代表者

沢宮 容子 (SAWAMIYA Yoko)

立正大学・心理学部臨床心理学科・教授

研究者番号：60310215

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：楽観性・悲観性・帰属様式

1. 研究計画の概要

本研究で取り上げる楽観性という概念については、Abramson, Seligman, & Teasdale (1978) が、無力感の予防策として楽観的な期待の必要性を論じたことに端を発し、その負の側面も含め数々の実証的な研究がなされてきた (Affleck, Allen, McGrade, & McQueeney, 1982; Manly, McMahon, Bradley, & Davidson, 1992; 増田, 1994; 坂野・戸ヶ崎, 1993; Seligman, 1991; 藤南・園田・詫摩, 1993; 戸ヶ崎・坂野, 1993 など)。「心理学は人間のより積極的な側面に注目すべきである」と Seligman が提唱したことで知られる「ポジティブ心理学」においても、楽観性は重要な概念となっている (小玉, 2002 など)。

本研究は、「母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人行動の改善に及ぼす効果」について検討することを目的とした。

期間内に以下の3点を明らかにする。

(1) 母親の対人的楽観性と幼児の対人行動との関係。

(2) 母親の対人的楽観性の変容が幼児の対人行動の改善に及ぼす効果。

(3) 母親の対人的楽観性の変容は幼児の問題行動を予防する上でいかなる効果をもつか。

2. 研究の進捗状況

(1) 母親の対人的楽観性と子どもの対人行動 (社会性) との関連について明らかにすることを目的とし、幼稚園・保育園3園の園児とその母親117名を対象とし、調査を実施した。調査にあたっては、親の対人的楽観性だけではなく、親の養育態度をも同時に取り上げ、各々が子どもの対人行動 (社会性) とどの程度関連をもつのか、相対的な重要度を検討した。

具体的には、幼稚園の園児の母親を対象に質問紙調査を実施した。また園児の担任教諭を対象にそれぞれの園児について質問紙調査を実施した。さらに、並行して園児を対象とした自然観察を行った。

データの分析は、3つの測定値が親子ペアとなってそろっている80組 (男児30名、女児50名) を対象に行った。その結果、子どもの対人行動 (社会性) と母親の対人的楽観性とは正の相関があり、子どもの対人行動 (社会性) は、母親の養育態度よりも母親の対人的楽観性との関連が高いことが明らかになった。

(2) (1)で行った研究の対象者から、性別、月齢、対人行動 (社会性) の発達程度などはほぼ同様な、母親の対人的楽観性が高い幼児の群と低い幼児の群とを抽出した。各群の幼児の対人行動 (社会性) の発達プロセスを、ビデオ録画および自然観察の分析などによって比較し、母親の対人的楽観性が幼児の

対人行動（社会性）に及ぼす影響についての検討を行っている。

さらに、現在、対象児の母親に対する個別面接も継続して実施している。

3. 現在までの達成度

③やや遅れている。

（理由）

予期せぬ公務の増大で、フィールドワークを含む研究時間の確保が困難となったため、研究計画の遂行に遅延が生じ、当初予定していた研究成果の達成には至っていないという現状がある。

しかし、これまで達成した一連の研究成果については、「平成20年度日本カウンセリング学会記念賞—独創研究内山記念賞」を受賞するなど、本研究のテーマや内容に関しては、学会で高い評価を得ている。

4. 今後の研究の推進方策

研究を推進する上での問題点としては、予期せぬ公務のためフィールドワークを含む研究時間の確保が困難となっていること、および個人研究費の削減に伴って予算的にも厳しい状況になっていることが挙げられる。

ただし前述したように、本研究のテーマや内容に関しては高い評価が得られており、既に一定の研究成果をあげていると考えられる。今後は、量的な研究に加え、質的な研究に重点をおくことによって、研究成果の達成度を高めていきたい。具体的には、今まで行った対象児に対するビデオ録画および自然観察の分析、あるいは対象児の母親に対する個別面接の結果などについて、さらに深い掘り下げを行えば、研究成果の達成度を高めていくことが可能であると考えられる。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 沢宮容子（印刷中）. 楽観的帰属様式がネガティブな側面への注目と抑うつ傾向に及ぼす影響 応用心理学研究 **査読有り**

- ② 沢宮容子・田上不二夫（2008）. 認知行動療法による悲観的帰属様式の変容 カウンセリング研究, **41**, 346-355. **査読有り**

- ③ 大工原美香・奥野誠一・沢宮容子（2008）. 気晴らし型反応スタイルと対処方略との関連 産業カウンセリング研究, **11**, 32-38. **査読有り**

- ④ 岡部良太・奥野誠一・染木史緒・芳川玲子・沢宮容子（2008）. 衝動性のコントロールに困難を示す小3男児へのソーシャルスキル指導——挙手行動に焦点を当てて—— LD研究, **17**, 181-190. **査読有り**

- ⑤ 沢宮容子（2006）. 母親の楽観性と子どもの社会性との関連 学校カウンセリング研究, **8**, 25-33. **査読有り**

〔学会発表〕（計 2 件）

- ① Yoko SAWAMIYA, Fujio TAGAMI et al. (2008). Impact of optimistic attributional style on attention to negative aspects and depressive tendency *The Proceedings of the 13th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine*, 153. **査読有り**（7人、1番目）
- ② Daisuke IKOTA, Seiichi OKUNO, Yoko SAWAMIYA, et al. (2008). The relationship between hope and problem-solving ability *The Proceedings of the 10th International Congress of Behavioral Medicine*, 231. **査読有り**（4人、3番目）

〔図書〕（計 1 件）

- ① 沢宮容子（2008）. アサーショントレーニング 内山喜久雄・坂野雄二（編）認知行動療法の技法と臨床 日本評論社 pp. 93-99.

〔その他〕

- ① 沢宮容子（2008）. 楽観的帰属様式の臨床心理学的研究 平成19年度筑波大学大学院人間総合科学研究科博士論文